日本中國學會報　第六十九集　拔刷
二〇一七年十月七日　發行

庾信北朝期作品における華北・長安表現の獨自性

西川ゆみ

庾信北朝期作品における華北・長安表現の獨自性

西川ゆみ

はじめに

庾信（五一三～五八一）は、南朝出身でありながら、後半生を北朝で過ごした望郷詩人として名が知られる。庾信は講和のために梁から西魏に派遣されたが、かえってその西魏によって故國を滅ぼされてしまう。そして、そのまま西魏、北周に仕え、二度と江南に戻ることはなかった。

庾信が前半生を過ごした南朝梁では、長安及び洛陽を繁華な美しい場所として描く手法が定着していた。詩人たちにとって、華北の都は自分たちの先祖が活躍した地であるが、異民族によって華北が統治されていた當時、梁の人々がそこへ行くことはかなわなかった。そこで彼らは、見たことのない華北の都を自分たちの想像力と知識とを用いて描こうとした。一方、故郷を離れ實際に華北を目にした庾信は、南朝の詩人たちとは全く異なる方法で華北の都・長安を描き出している。

この二者の描き方の相違は、當然庾信の置かれた境遇と、南朝の詩人たちの境遇との違いによるものである。しかし、本論は境遇の相違に歸着するのではなく、庾信の境遇が南朝一般の詩人たちと異なるということが、庾信自身の表現そのものをいかに變えたのか、この點に着目して考察を行う。そして庾信の表現の特徴から、彼の創作姿勢についても探求することを試みる。

一、南朝の詩人たちによって描かれる華北の都

第一章では、謝朓の作品を取り上げ、南朝の都・建康（現在の南京）を華北の都になぞらえる表現の存在をまず指摘する。そして、長安・洛陽を題材とする南朝、特に梁陳の詩人たちの作品を擧げ、彼らの華北の都に對する憧憬の念について考察する。

南朝齊の謝朓「晩に三山に登り還りて京邑を望む（晩登三山還望京邑）」（『文選』卷二七）は、江寧縣の北、長江沿いに三つの山が連なる「三山」から、都・建康を眺めたことを機に作られた。[1] 詩中の有名な「澄江は靜にして練の如し」は、悠然と流れる長江を描き出しており、詩題とも合致する江南の情景を展開している。ところが、詩人が眺めやる都・建康については、華北の都の名を用いて表現されている。

灞涘望長安　　灞涘に長安を望み
河陽視京縣　　河陽に京縣を視る

白日麗飛甍　白日は飛甍を麗（てら）し
參差皆可見　參差として皆見るべし
餘霞散成綺　餘霞は散りて綺と成り
澄江靜如練　澄江は靜にして練の如し

作品の冒頭「灞涘に長安を望む」は、王粲「七哀詩二首」其の一（『文選』巻二三）の「南に霸陵の岸に登り、首を廻らして長安を望む（南登霸陵岸、廻首望長安）」に基づき、「河陽に京縣を視る」は、潘岳「河陽縣作二首」其の二（『文選』巻二六）の「領を引きて京室を望む（引領望京室）」による。冒頭二句は、詩人が三山から建康を望むことを、長安を望む王粲、洛陽を望む潘岳の姿を借りて表現する。この自身の行爲と古人の行爲を重ね合わせる表現は、見る對象となる現實の都と、往時の華北の都をも重ね合わせる效果を持つ。この例から、華北の都の名が現實の都の美稱として用いられていたこと、言い換えれば南朝人たちの實際の都と華北の都とは、言語表現上親密なつながりを有していたことが指摘できると思われる。

長安・洛陽といった華北の都を、當時の南朝の詩人たちは好んで詩歌上に取り上げている。謝朓と同時期に活躍した沈約は「登高望春」（『玉臺新詠』巻五）において、華北の都を以下のように描き出している。

登高眺京洛　高きに登りて京洛を眺む
街巷紛漠漠　街巷は紛として漠漠たり
回首望長安　首を回らして長安を望む
城闕鬱盤桓　城闕は鬱として盤桓たり
日出照鈿黛　日出でて鈿黛を照らす
風過動羅紈　風過りて羅紈を動かす
齊僮躡朱履　齊僮は朱履を躡み
趙女揚翠翰　趙女は翠翰を揚ぐ
春風搖雜樹　春風は雜樹を搖らし
葳蕤綠且丹　葳蕤　綠にして且つ丹なり
寶瑟玫瑰柱　寶瑟　玫瑰の柱
金羈瑇瑁鞍　金羈　瑇瑁の鞍

「望春」の舞臺として設定されているのは、「京洛」つまり洛陽と、「長安」である。長安か洛陽のどちらか一方を擧げるのではなく、華北の二つの都を竝置している點がまず認められるだろう。前掲の謝朓の作品でも建康の美稱として二都兩方に言及しており、長安・洛陽を一揃いにまとめる發想が共通している。ちなみに、第三句の「首を回らして長安を望む」は、先に引用した王粲「七哀詩二首」其の一の詩句をそのまま用いたもの。謝朓と共通の典故を用い、そして同じく長安・洛陽を竝置する沈約のこの表現は、「望春」の舞臺が實は建康であるとほのめかしているのかもしれない。

次に着目したいのは、眺めやる長安と洛陽の町が繁華な場所として描き出されていることである。「街巷は紛として漠漠たり」の巷のにぎわい、「城闕は鬱として盤桓たり」の城壁の作りの重厚感、「齊僮は朱履を躡み、趙女は翠翰を揚ぐ」の樣々な地域出身の見目麗しい男女の姿が順々に描かれる。町の活氣やそこに建ち竝ぶ建築に見える國力、そして町に住む美しい人々は、都の華やかさを體現する要素だと考えられる。

さらに、都の華やかさを最もよく表現しているのは、「春」の季節であろう。「春風は雜樹を搖らし、葳蕤　綠にして且つ丹なり」と、春の情景を描く。二都にふさわしいのは、その生き生きとした華やかさを表現できる春の季節だったのであり、春と二都とは華やかさを共

通項としてイメージの上で強く結びついていたと考えられる。そもそも、詩題の「望春」の舞臺に最も相應しい場所として、長安・洛陽を設定する點が都と春との結びつきを證明している。

都は華やかで活氣のある美しい場所として描かれており、表現の中に負の要素は一切含まれていない。陽性の事物で彩られた表現の背景には、詩人たちの華北の都に對する憧憬の念があったと想像される。當時の詩人たちが華北の都を特に好み、憧憬の念を抱いていたことは、彼らが華北の都を歌うための樂府題を新たに作り上げていることに端的に表れている。長安と洛陽に關わる古くからある樂府題として、「長安有狹斜行」や「煌煌京洛行」があるが、梁の詩人たちはそれに飽き足らず、新たに「長安道」と「洛陽道」という樂府題を創作している。

この新たな樂府題の創作背景については、增田淸秀氏によってすでに考察されている。[2] 增田氏は「「長安道」と「洛陽道」は、ともに梁の武帝の時代に創作された歌曲であると推定される」と述べ、[3] 梁代にこの二曲が創作された背景として、「一つは、梁代の樂府作家の中で、長安・洛陽の古都に對して、それらを歌詠した古曲を主題にするだけでは飽き足りないで、進んで新曲を作ろうと圖る者が出たこと。いま一つは、南朝人が等しく懷抱せる古都への憧憬と慕情を、梁人が積極的に歌曲の樣式で具象化しようとしたこと」を擧げている。「長安道」と「洛陽道」は、梁の詩人たちの華北の都に對する憧れが高じて生み出された樂府題と言えよう。

「長安道」と「洛陽道」の作者として、庾信が仕えた梁簡文帝や、庾信とともに梁の文壇で創作活動に携わった徐陵などの名が竝ぶ。庾信が梁にあったころ、文壇を先導する立場にあった詩人たちは、いかに華北の都を描き出しているのだろうか。まず、徐陵の「洛陽道二首」其の一（『樂府詩集』卷二三）を見ていこう。

綠柳三春暗　綠柳　三春に暗く
紅塵百戲多　紅塵　百戲多し
東門向金馬　東門　金馬向かい
南陌接銅駝　南陌　銅駝接す
華軒翼葆吹　華軒は葆吹を翼（ひろ）げ
飛蓋響鳴珂　飛蓋は鳴珂を響かす
潘郎車欲滿　潘郎　車滿たんと欲す
無奈擲花何　擲花を奈何ともする無し

ここで洛陽描寫の主眼となっているのは、その繁華なさまである。柳が繁る春の情景を點描し、都の賑わいの中、各種の催しが行われることを歌う。そして金屬製の動物の立像が立ち竝ぶ壯麗な大通りの樣子、豪奢な馬車が行き過ぎていく樣子を描き出している。こうした徐陵の描寫の中には、沈約「登高望春」における長安・洛陽の描き方との共通點を多く見出すことができよう。

一方、洛陽らしい表現として、美貌で知られる潘岳に言及する點が擧げられる。潘岳と言えば、若いころ街に繰り出せば、女性たちがこぞって彼に果物を投げたという逸話が、『晉書』に載せられている。[4] 潘岳に關わる表現は、「洛陽道」に好んで用いられ、「玉車は爭いて晩に入り、潘果は高箱に溢る（玉車爭晩入、潘果溢高箱）」（梁簡文帝「洛陽道」、『玉臺新詠』卷七）や、「潘生は時に未だ返らず、遙心は徒らに眷然たり（潘生時未返、遙心徒眷然）」（庾肩吾「洛陽道」、『樂府詩集』卷二三）などと歌われている。潘岳のモチーフは、洛陽らしさを表現するとともに、沈約作品における「齊僮」「趙女」と同じく、都の人々の

麗しさをも表現する效果を有している。

次に擧げる梁元帝の「長安道」（『樂府詩集』卷二三）では、長安と洛陽とが渾然一體となって描き出されている。

西接長楸道　西は長楸の道に接し
南望小平津　南に小平津を望む
飛甍臨綺翼　飛甍は綺翼に臨み
輕軒影畫輪　輕軒は畫輪に影なす
雕鞍承赭汗　雕鞍は赭汗を承け
槐路起紅塵　槐路に紅塵　起こる
燕姬雜趙女　燕姬　趙女を雜え
淹留重上春　淹留して上春を重ぬ

第一句の「西は長楸の道に接す」は、曹植「名都篇」（『文選』卷二七）の「馬を走らす長楸の間（走馬長楸間）」に基づく。「名都篇」とは「京洛は少年を出だす（京洛出少年）」と歌う洛陽を舞臺とする作品である。また第二句の「小平津」は河南郡鞏縣にあり[5]、これも洛陽に屬する地名である。元帝「長安道」は、冒頭二句で洛陽について歌っており、長安と洛陽とを別々の場所だと區別せずに描く發想が見て取れる。

長安と洛陽とを區別しないことについて、增田氏は梁代の詩人たちが抱いていた「曖昧な古都觀」を指摘する。增田氏は「梁人は、概ね長安も洛陽も等しく古都であるという見地から、歌辭が歌題に添っているか否かを、まったく咎め立てようとしなかった。してまた、二つの古都に對して、相等しい憧憬と慕情を寄せていたから、一たび長安を想起すれば、直ちに洛陽を連想するという連鎖反應に左右されて、兩都が不即不離の地に在るかのように錯覺し、兩都間の地理上の距離を感得していなかったようである。換言すれば、古都は二つでもあり、また、一つでもあるという曖昧な古都觀を懷いていた[6]」と述べている。梁元帝の「長安道」における長安と洛陽とを一體にして描く手法は、當時の詩人たちの一般的な認識―曖昧な古都觀―の上に立つものであったと考えられる。

そのため、長安の描き方は洛陽の描き方とほとんど同じである。元帝の作品でも建ち竝ぶ壯麗な建物、大通りを行く華やかな馬車などが取り上げられ、人々がにぎやかに行き交う場面を切り取っている。ここでは潘岳ではなく「燕姬」「趙女」といった美女たちが登場するが、麗しい人々を登場させる點は共通している。

そして長安の季節も春であることが、「淹留して上春を重ぬ」句から知られる。この句は「燕姬」「趙女」らとともに留まって、春の宴を續けることを指していると考えられるが、「淹留」するものを都の繁榮と見ることも可能であろう。すなわち、この長安の都の中に都の種々のにぎわいを留めて、春眞っ盛りの時間を重ねていく。永遠に續いていく都の繁榮をも表現しているのではないかと想像される。

梁陳の詩人たちは、華北の都である長安・洛陽を繁華な美しい場所として描き出していた。二都を描く際に、負の要素を一切取り上げず、陽性の華やかな事物で彩り、ひいては二都を描くためだけの樂府題を新たに作り上げた詩人たちの創作意欲を支えていたのは、華北の都に對する强烈な憧れであったと推測される。

ただ、この憧憬の念は二都を遠いものとしてとらえ、畏敬の念を抱く、といった心情ではなかった。本章の冒頭で見たように南朝の都・建康を描く際に華北の都の名を冠して歌った背景には、華北の都を親密な場所としてとらえる愛着の情があったと思われる。臺灣の王文進

氏も、南朝の人々が漢代の長安を好んで取り上げることに觸れ、こうした表現は現在の建康と漢代の長安との境界を取り除いたような、時空を混在させた表現であると指摘している。さらに、こうした表現を生み出した要因として、王氏は第一に「華北の都に對する愛着（北都神州的意識依戀）」を擧げているのである。[7] この愛着は、自分たちはかつて中原に花開いた文化の正統的な繼承者であるという、南朝人の自負から生じたものと思われる。要するに、當時の詩人たちは華北の都に對して、愛着を伴った憧憬の念を抱いており、そうして描き出された華北の都は、繁華な美しい場所としての性格を自然と帶びていったのだと考えられる。

最後に付け加えておきたいのは、庾信も南朝梁にあったときは、當時の詩人たちと同樣、いやそれ以上に華やかに、華北の都を繁華な美しい場所として描き出していることである。彼の南朝期の作品とされる「春賦」（『庾子山集注』卷一）には以下のようにある。

宜春苑中春已歸　宜春苑中　春已に歸して
披香殿裏作春衣　披香殿裏　春衣を作す
新年鳥聲千種囀　新年の鳥聲は千種の囀り
二月楊花滿路飛　二月の楊花は路に滿ちて飛ぶ
河陽一縣併是花　河陽一縣併びに是れ花なり
金谷從來滿園樹　金谷從來滿園の樹

長安宮城内にあった「宜春苑[8]」、「披香殿[9]」の名を擧げると同時に、第五・六句で河陽太守であった潘岳、金谷苑を所有した石崇等、西晉の貴族にも言及し、長安と洛陽とが渾然一體と重なり合った境地を描き出している。この表現から、當時の庾信も梁朝の他の詩人たちと同樣、華北の都に對する憧憬の念を有していたことがうかがえよう。

二、庾信北朝期作品における「長安」表現
―邊境描寫との關わり

では、多くの南朝人と異なり、實際に長安を目にした庾信は、北朝に在って華北の都をどのように描くようになったのだろうか。第二章では、庾信の北朝期の作品において、長安を描く際、邊境描寫に特徴的な表現を用いていることに着目し、庾信作品における長安表現の獨自性について考察する。

『周書』を見ると、北周政府は庾信が故鄕江南に歸ることを許さなかったと述べられている。[10] 庾信の代表作「哀江南賦」序文の「鍾儀の君子は、入りて南冠の囚に就く。季孫の行人は、留まりて西河の館を守る[11]（鍾儀君子、入就南冠之囚。季孫行人、留守西河之館）」（『庾子山集注』卷二）からは、故鄕梁への思いを強く持ちながら、長安で生きていかざるを得なかった庾信の苦しみを讀み取ることができる。

子供を失くした悲しみと亡國の悲しみを詠う「傷心賦」（『庾子山集注』卷一）では、秦川で過ごすことに對する恨みが次のように表現されている。

況乃流寓秦川　況んや乃ち秦川に流寓し
飄颻播遷　飄颻して播遷す
從官非官　官に從うも官に非ず
歸田不田　田に歸りても田つくらず
對玉關而羈旅　玉關に對して羈旅し
坐長河而暮年　長河に坐して暮年す
已觸目於萬恨　已に目を萬恨に觸れしめ
更傷心於九泉　更に心を九泉に傷つく

「秦川に流寓す」、秦川に假住まいするとの言葉には、第一章で述べた華北の都に對する憧憬の念は含まれてはいないだろう。中でも注目したいのは、「玉關に對して羈旅す」という、長安での生活を、西域の僻地である玉門關での羈旅と重ね合わせる表現である。長安を描く際、邊境を引き合いに出すのは、當時長安が異民族の統治下にあったことが影響しているだろう。だが、表現のレベルで考えれば、邊境の地を旅する、またはそこで從軍する人々のような、望鄕の思いと苦しみを背負って長安で過ごす庾信の心情が强調されていると考えられる。

長安と邊境とを重ね合わせる表現は、庾信の代表作「擬詠懷二十七首」（『庾子山集注』卷三）の中にも指摘することができる。「擬詠懷」には、荊軻について述べるものが三例あり、そのうち二例は荊軻と李陵蘇武とを對置している。荊軻は始皇帝暗殺の任を帶びて、燕から秦の咸陽に向かった人物であり、庾信自身も西魏との講和という大任を帶びて、南朝梁から長安に向かった。彼らの道程は、出發點こそ異なっているものの、ともに秦の方向へ向かっている點は共通している。このことから、荊軻は庾信自身をなぞらえたものと考えられる。その荊軻と李陵蘇武とを對置することで、庾信はなにを表現しようとしたのだろうか。まずは、「擬詠懷」其の十を見ていこう。

悲歌度遼水　悲歌して遼水を度り
弭節出陽關　弭節して陽關を出づ
李陵從此去　李陵は此より去り
荊卿不復還　荊卿は復た還らず
故人形影滅　故人は形影滅し
音書兩俱絕　音書は兩つながら俱に絕えたり
遙看塞北雲　遙かに看る　塞北の雲
懸想關山雪　懸けて想う　關山の雪
遊子河梁上　遊子　河梁の上
應將蘇武別　應に蘇武と別るべし

第三、四句で荊軻と李陵とを對にする。「復た還らず」は、荊軻の易水の歌「壯士一たび去りて復た還らず（壯士一去兮不復還）」（『史記』卷八六・刺客列傳）に基づき、第一句を受けたもの。そして第二句を受ける第三句で、李陵は「此より去る」と、もとあった場所から離れて行ってしまったことを歌う。具體的な位置關係は異なっているが、ともに各々の目的地である異鄕（秦と匈奴の地）への道程を暗示した表現が選擇されている。二つの道のりを竝置することで、二者の共通點である、道程の先にある故鄕に歸れない絕望がより强調されている。

この作品の最終二句は、李陵作とされる「與蘇武詩三首」其の三（『文選』卷二九）の「手を携えて河梁を上る、遊子　暮れに何くにか之く（携手上河梁、遊子暮何之）」に基づく。「應に蘇武と別るべし」からは、漢へと歸還する蘇武を見送る視點が讀み取れ、この歌い手は邊境に取り殘される李陵の側に立っていると考えられる。つまり、荊軻になぞらえられる歌い手は、あたかも邊境の地にある李陵のごとく、秦の地で過ごしているのである。二者の對置によって、秦の地と邊境の地が同等の苦しみの場であることが表現されていよう。

「擬詠懷」其の二六では、荊軻と蘇武とを對にしている。

秋風蘇武別　秋風　蘇武に別れ
寒水送荊軻　寒水　荊軻を送る

この作品では、蘇武と荊軻の別れの場面を特に取り出している。李陵には言及していないが、庾信の贈答詩に「蘇武」の語のみを用いて李陵の存在を際立たせる表現の例[12]があり、ここでも暗に李陵の存在が

示されていると思われる。大任を帶びて秦に送り出される荊軻と、友が去り邊境に取り殘される李陵とを重ね合わせることで、邊境で過ごす苦しみと同等の苦しみが秦の地で待っていることが表現されていると考えられる。

荊軻に言及するもう一例「擬詠懷」其の三は、荊軻と隴頭を越えていく「秦人」とを對置している。

燕客思遼水　燕客は遼水を思い
秦人望隴頭　秦人は隴頭より望む

「秦人は隴頭より望む」は「隴頭流水」歌辭、「隴頭の流水、鳴聲幽かに咽ぶ。遙かに秦川を望む、肝腸　斷絶す（隴頭流水、鳴聲幽咽。遙望秦川、肝腸斷絶）」（『初學記』卷二五に引く辛氏『三秦記』）に基づく。「隴」は中原から西域への入口であり、人々は「隴」で故郷を見納め嘆いたと『後漢書』に記載されている。[13] つまり、この「秦人」とは單なる秦出身者ではなく、秦から西域への邊境に向かう道程にある人を指し、やはり荊軻と對置するものとして、邊境で苦しむ人が取り上げられている。

荊軻が庾信自身をなぞらえたものと見なすならば、荊軻のように秦の地に赴き、そこで過ごす庾信の境遇が、あたかも李陵が邊境の地に取り殘されているようなものだと歌っているに等しい。庾信は長安で過ごす自身の心境を歌おうとするとき、匈奴の地にある李陵の苦難にその表現の形を求めようとしているのである。

さらに「怨歌行」（『庾子山集注』卷五）にも、長安で過ごす心境を、邊境にいる苦しみになぞらえた表現が見える。そもそも「怨歌行」は、寵愛の喪失を恐れる宮女の不安を歌う「宮怨」をテーマとする樂府題で、前漢の班婕妤の作品（『文選』卷二七）が最も古いものである。しかし庾信は「怨歌行」の題の下、宮女ではなく金陵（建康）から長安へと嫁いだ女性を主人公に据え、その女性が夫に苦しみを訴えるさまを次のように描き出している。

家住金陵縣前　家は住む　金陵縣の前
嫁得長安少年　嫁し得たり　長安の少年
回頭望鄉淚落　頭を回らして鄉を望めば淚は落つ
不知何處天邊　知らず　何處の天邊なるかを
胡塵幾日應盡　胡塵は幾日か應に盡くべき
漢月何時更圓　漢月は何時か更に圓かなる
爲君能歌此曲　君が爲に能く此の曲を歌うも
不覺心隨斷弦　覺えずして心は斷弦に隨う

金陵縣から長安の男性に嫁いで、ここ長安へとやって來た。振り返り故鄉を望めば淚が流れてくる。一體故鄉はどこの空の下にあるのだろう。胡地に舞う塵はいつの日になればなくなり、漢を照らす月はいつになれば滿月になるのだろう。あなた樣のためにこの歌を歌うことはできるけれど、知らないうちに私の心は絃とともに斷ち切れそうだ。

この作品には、邊境を舞臺とする作品に特徵的な「胡塵」や「漢月」といった語が用いられている。長安を舞臺とする「怨歌行」において、「胡」と「漢」は一體どこを指しているのだろうか。庾信の作品について考察する前に、「胡塵」や「漢月」という表現が、庾信以前及び同時期の南朝の詩人たちによって、いかに用いられてきたのかについて見ていこう。まず「胡」と「漢」とを對比する表現手法について考察する。この手法は、鮑照の邊境を歌う作品に初めて見られる。[14] 邊境で從軍する兵士を描く鮑照「代陳思王白馬篇」（『鮑氏集』卷三）には以下のようにある。

埋身守漢節　身を埋めて漢節を守り
沈命對胡封　命を沈めて胡封に對す
薄暮塞雲起　薄暮　塞雲起こり
飛沙披遠松　飛沙　遠松を披（おお）う

從軍する兵士の立つ場所は、雲が沸き起こり、砂が風に吹かれて飛ぶ邊境の地である。自分は異民族の領土「胡封」で命を落とすだろうが、漢に對する忠節「漢節」を守るという。「胡」は兵士が今立っている場に冠され、「漢」は兵士の心情に關わる語に冠される。

次の鮑照「代出自薊北門行」（『鮑氏集』卷三）にも、胡と漢の對比の手法が用いられている。

簫鼓流漢思　簫鼓は漢思を流し
旌甲被胡霜　旌甲は胡霜に被わる
疾風衝塞起　疾風は塞を衝きて起こり
沙礫自飄揚　沙礫は自ら飄揚す

この作品の舞臺も、砂が卷き上がる邊境地帶であり、上に同じく「胡」は兵士が立っている場に降る霜に冠され、「漢」は兵士の心情に冠されている。つまり、この對比の手法は、邊境にいるという兵士の逃れようのない現實の狀況を明示し、かつその狀況にあるからこそ強く意識される兵士の望鄉の念を際立たせていると言えよう。

鮑照の「代出自薊北門行」を踏襲した徐陵の「出自薊北門行」（『藝文類聚』卷四一）も、胡と漢の對比を用いている。

屢戰橋恆斷　屢しば戰いて橋は恆に斷たれ
長冰塹不流　長く冰りて塹（ほり）は流れず
天雲如地陣　天雲は地陣の如し
漢月帶胡秋　漢月は胡秋を帶ぶ

ここで「胡」は邊境描寫に特徵的に描かれる「秋」の季節に冠される[15]一方、「漢」は歌い手の思い人を暗示する景物「月[16]」に冠されている。ここで兵士の望鄉の念を表す「月」は、「胡秋」に覆われている。徐陵は對比表現によって、邊境にあって故鄉を思う兵士の姿と、その望鄉の念を覆い隱そうとする邊境空間、という人と空間との相克を描き出している。

以上の例より、胡と漢の對比手法の特徵について、以下のようにまとめられる。まず、この手法は邊境を舞臺とする作品において用いられる。そして、身の回りは一面邊境の風土に取り圍まれていることを、「胡」の語が表現し、一點だけは邊境の風土に染まらないものが存在することを「漢」の語が表現する。鮑照の例では、「漢」の語は兵士の心情に關わる「節」や「思」に冠され、兵士の內面は決して「胡」には侵されない、という邊境に對する兵士の反發の情を示していた。さらに徐陵の例では、望鄉の念を象徵する「月」を覆い隱す邊境空間が描かれ、空間が人を侵そうとする勢いが表現されていた。したがって、胡と漢の對比は、人と空間とが反發しあう相容れない關係性を提示するものだと考えられる。

このような手法は、王昭君を歌う作品の中で好んで用いられてきた。梁簡文帝の「明君詞」（『樂府詩集』卷二九）には以下のようにある。

一去葡萄觀　一たび葡萄觀を去り
長別披香宮　長（とこしえ）に披香宮と別る
秋簷照漢月　秋簷に漢月は照らし
愁帳入胡風　愁帳に胡風は入る

長安を離れて匈奴の地に暮らす王昭君にとっても、兵士と同じく月だけが故鄉・長安を偲ぶことのできるものであり、身邊には漢出身の

自分とは相容れない胡の地で生まれた風が吹いてくるのである。そして、陳で活躍した張正見の同じく「明君詞」（『樂府詩集』巻二九）でも、王昭君の望郷の念を表す「漢月」が描かれる。

寒樹暗胡塵　寒樹は胡塵に暗く
霜樓明漢月　霜樓は漢月に明るし
淚染上春衣　淚は染む上春の衣
憂變華年髮　憂いは變ず華年の髮

寒々と立つ木々、霜が降りる極寒の匈奴の地に、「胡塵」が巻き起こって邊りを暗くし、その中で明るく照る「漢月」が昇る情景が提示される。梁簡文帝と張正見はともに、王昭君を歌う作品の中で、胡と漢の對比表現を用いて、王昭君の望郷の念、及び彼女と邊境空間との相容れない狀態を描き出している。つまり南朝詩壇において、胡と漢の對比表現、及び「漢月」の語は、前線の兵士や王昭君といった邊境の地に立つ人々を歌いあげるために傳統的に用いられてきた、と言える。

ところで、張正見は「胡塵」と「漢月」を對にしていたが、これは庾信が「怨歌行」で對にしていた語と全く同じである。すなわち、語彙のレベルで言えば、「怨歌行」は匈奴の地で悲嘆にくれる王昭君を描く言語表現と共通するものを用いている。となると、王昭君を描く語彙と共通のものを用いることで、長安に嫁いだ女性の嘆きと王昭君の嘆きとを重ね合わせ、さらには二人の女性が過ごす空間そのものをも重ねて提示しようとしているのではないだろうか。

王昭君のいる匈奴の地は、身邊に風が吹き込み、塵が邊りを覆い隠すような、我が身に嚴しく迫ってくる場として描かれていた。王昭君を歌う作品において、邊境は彼女を受け入れもせず、かと言って解放することもしない、閉塞された空間として立ち現れる。

庾信「怨歌行」に描かれる女性も、空間に閉塞されている心情を吐露している。今いる場所と故郷との距離を「何處の天邊」といい、長安から金陵の道のり以上に懸隔のあるものとしてとらえ、かつ故郷の方向を知ることのできない悲しみを歌う。なぜ故郷の方向を知り得ないのかと言えば、「胡塵は幾日か應に盡くべき」、今いる空間から起きてくる塵があたりを覆い隠しているからである。さらに「漢月は何時か更に圓かなる」と、滿月を望めず圓滿な未來も期待できない見通しの持てない狀況を歌う。「怨歌行」では胡と漢の對比表現を用いて、視界の面でも、そして未來に向けても見通しの持てない、女性の閉塞感が描き出されていると言える。つまり、女性が嫁いでやって來た、今立つ長安という場は、王昭君にとっての匈奴の地と同じく、閉塞感を感じさせる場なのだ、と庾信は歌っていると考えてよいだろう。

では「怨歌行」における「胡」と「漢」は、どこを指すのだろうか。「胡」は閉塞感を與える場、「漢」は歌い手の故郷という、場の性格は「怨歌行」でも王昭君を歌う作品でも共通している。しかし、これらの語が指す具體的な場は全く異なっている。王昭君の場合、「漢」―故郷・長安、「胡」―匈奴の地であるが、「怨歌行」の場合では、「漢」―故郷・金陵、「胡」―長安という構圖になっている。要するに長安は、南朝詩壇では「漢」に屬していたのが、庾信「怨歌行」では「胡」に屬するものとなり、長安という場に與えられる性格が變化しているのである。

ちなみに、庾信は「出自薊北門行」（『庾子山集注』巻五）でも「漢月」の語を用いている。上に引用したように徐陵にも同題のものがあり、この作品はおそらく庾信南朝期の作と推測される。この作品では、

「薊門より還りて北望す、役役　盡く情を傷ましむ。關山は漢月に連なり、隴水は秦城に向かう（薊門還北望、役役盡傷情。關山連漢月、隴水向秦城）」といい、徐陵と同じく、北方邊境に從軍する兵士の望鄕の念を體現するものとして「漢月」に言及する。さらに庾信の作では、「漢月」は「秦城」と對置され、「漢」が長安を含む中原一帶を指すことは明らかである。つまり、庾信の南朝期と北朝期とでは、「漢月」一語の用法が全く異なっており、詩人の境遇が表現に與えた影響を如實にうかがうことができる。

庾信の北朝期の作品では、長安を描き出す際、邊境に關わる要素を特に用いていた。自らをなぞらえた人物である荊軻と、匈奴の地に取り殘された李陵を對置し、金陵から長安へと嫁いだ女性を描くために、匈奴に嫁いだ王昭君を歌う言語表現を利用する。長安に立つ人物と、邊境に立つ人物とを重ね合わせて描くことで、長安で味わう苦しみが邊境と同等であることが示される。そうすることで、苦しみという共通項を持つ二つの場、長安と邊境は心理的に同等の性格を持つ場であることがほのめかされているのではないか。これらの表現からは、庾信にとって長安がすでに憧憬の對象ではなくなってしまったこと、むしろ憧憬とは對極にある心情を持って見つめられていたことが指摘できると思われる。

三、「擬詠懷」其の一と其の五における典故表現の獨自性

庾信「擬詠懷二十七首」（『庾子山集注』卷三）は、阮籍「詠懷詩」を擬した庾信の代表作であり、彼の屈折した思いが表現された大變難解な作品である。その難解さの中には、彼の思索や彼の經驗した艱難辛苦などのほかに、第二章で述べた庾信獨自の長安表現も、そこに大きく關わっていると思われる。第三章では「擬詠懷」其の五及び其の一を取り上げ、華北の京畿一體及び北方前線地帶に關わる典故表現に着目し、その獨自性について考察する。まず「擬詠懷」の其の五を以下に擧げる。

惟忠且惟孝　惟れ忠にして且つ惟れ孝
爲子復爲臣　子爲りて復た臣爲り
一朝人事盡　一朝　人事盡き
身名不足親　身名　親しむに足らず
吳起嘗辭魏　吳起は嘗て魏を辭し
韓非遂入秦　韓非は遂に秦に入る
壯情已消歇　壯情は已に消歇し
雄圖不復申　雄圖は復た申べず
移住華陰下　移りて住む　華陰の下
終爲關外人　終に關外の人と爲る

忠孝を信條にして、子であり臣であろうと努めてきたのに、一瞬にして世の中のことは崩壞してしまい、自分の身と築きあげてきた名はそぐわないものになってしまった。吳起は武侯に疑われて魏を後にし、韓非子は秦に行っても始皇帝の信用を得ることはできなかった。今はもう亡き梁朝に對する思いも盡き果て、雄大な未來圖も語られることはない。華山のふもとに移り住み、とうとう關外の人になってしまった。

この作品は華北の京畿一帶に關わる故事を典故として用いている。それが、最終二句「移りて住む　華陰の下、終に關外の人と爲る」である。「關外の人」とは、前漢の楊僕の故事に基づく。『漢書』卷六・

武帝紀の「（元鼎）三年冬、函谷關を新安に徙す。故關を以て弘農縣と爲す（三年冬、徙函谷關於新安。以故關爲弘農縣）」という記事について、應劭はこの移設の理由を以下のように説明する。すなわち、樓船將軍楊僕が關の外の民であることを恥じて、函谷關を東に移設することを乞うたからだ[17]、と。楊僕は『史記』卷一二二・酷吏列傳によれば「宜陽の人」であり、もとの函谷關の外（東）の出身であった。彼は關内の民になるために、函谷關の移設を乞うたのである。楊僕の故事からは、當時の人々の函谷關内出身者になることへの憧憬や執着といった心情をうかがうことができる。

では、庾信はこの故事をどのように詩中に用いているのだろうか。この作品の歌い手は「華陰」に住まうという。『漢書』卷二八上・地理志上によれば、「華陰」は「京兆尹」にあり、上述の楊僕が宜陽にあったのとは異なり、歌い手は「關内」に屬していることになる。『漢書』の中での地理的位置に即すれば、「移りて住む　華陰の下、終に關〈内〉の人と爲る」と言うべきところであろう。

ところが、庾信はことさらにそれを「關外の人」と表現する。この部分について、倪璠『庾子山集注』は、「子山　楚を辭して秦に入る、翻って關内を慚ず（子山辭楚入秦、翻慚關内矣）」とコメントしている。「關内」はすなわち華陰及び長安を指す。庾信は南朝梁を辭して、北朝の長安で過ごす身となった。ところが彼は、關内で過ごすこと及び關内自體に對して慙愧の念を抱いている。このように倪璠は解釋しているのである。

庾信は長安に對する屈折した心情を表現するために、關外の民であることを恥じて、腐心して關内に籍をおこうとした楊僕の故事を取り上げる。故事を想起させる語を用い、長安を中心とする京畿に對する憧憬の念があったということをまず示す。そのうえで楊僕があこがれた關内に含まれる華陰に住んでも、自分にとっては楊僕が恥じた關外の民になるに等しいと述べる。つまり、楊僕の故事を構成するキーワード（「關外」、楊僕が籍をおこうとした關内を暗示する「華陰」）を用いて、京畿に對する憧憬の念を喚起する一方、故事の文脈に逆らう形でキーワードを配置し、自身の京畿に對する慙愧の念を鮮烈に表現するのである。

もう一つの例、「擬詠懷」其の一は北方前線地帯に位置する「長岑」を取り上げる。

步兵未飲酒	步兵未だ飲酒せず
中散未彈琴	中散未だ彈琴せず
索索無眞氣	索索として眞氣無く
昏昏有俗心	昏昏として俗心有り
涸鮒常思水	涸鮒は常に水を思い
驚飛每失林	驚飛は每に林を失う
風雲能變色	風雲は能く色を變じ
松竹且悲吟	松竹は且つ悲吟す
由來不得意	由來　意を得ず
何必往長岑	何ぞ必ずしも長岑に往かん

步兵校尉の位にあって酒を好きなだけ飲んだ阮籍のようにはまだなれていないし、中散大夫だった嵇康は琴を彈いて心中滿足したというが、私はまだ嵇康のようにはなれていない。心はいつもおびえて眞氣はなく、暗愚なために俗心ばかりがある。渴いた鮒は常に水のある場所を思い、驚き飛び立った鳥はいつも棲みかである林を見失う。世の風向きはころころと變わり、そのために節有る松竹は泣いて悲しんで

いる。はじめからずっと私は意を得ないでいる、どうしてわざわざ長岑へと赴く必要があるだろうか。

遼東樂浪郡にある「長岑」[18]を含む最終二句は、次に示す崔駰の故事に基づいている。竇憲によって見出された崔駰は、彼の屬官となる。權力をほしいままにする竇憲に崔駰は何度も諫言したが、憲は聞き入れなかった。擧句の果てに竇憲に疎まれて、崔駰は長岑の長官の職を與えられる。崔駰は長岑が遠くの任地であったことから、「不得意」意を得ずにそのまま官職にはつかず鄉里に歸ってしまった、[19]という。

（『後漢書』卷五二・崔駰傳）

この崔駰の故事を用いた表現及び「擬詠懷」其の一については、すでに安藤信廣氏が詳細に研究されている。[20]氏は當該二句について、「崔駰にとっては「遠去（遠く去る）」ことが「不得意」なのだ。逆にいえば崔駰は、權力者の專權のもとにあっても、都で官僚として生きる日常をともかくも許容できるものとしていたのである。だが、庾信の「擬詠懷」の語り手は「由來不得意」と述べている。「由來」もともと、はじめからずっと、「不得意」なのだ。「擬詠懷」では、現在の日常そのものが「不得意」なのである」と述べ、故事における「不得意」と、「擬詠懷」における「不得意」との次元の相違を指摘する。そしてこの二句が表明するのは、「自己の生存を容認できない、だが現に生存しているし生存するほかない、その一日また一日とくりかえされる閉ざされた煩悶」であるとまとめられている。

ここでは安藤氏の指摘をふまえた上で、「擬詠懷」其の一における崔駰の故事の用いられ方に焦點を當てて、管見を述べてみたい。この逃れられない煩悶の情、そして許容できない現實を表現するために、庾信は「長岑」という邊境地帶に關わる故事を用いている點にまず着目したい。崔駰が出仕するのを嫌がった長岑は、上述したように遼東に屬する地名である。遼東は幽州に屬し、付近には代郡、雁門、薊などがある。[21]これらの地名は、庾信が前半生を過ごした梁の詩壇において、邊境を歌う際に多く用いられた地名である。

遼東付近を舞臺とする作品の例として、第二章で取り上げた鮑照をはじめとする「出自薊北門行」が擧げられる。遼東を含む北方邊境地帶は、兵士が戰いに身を投じる地だというイメージは、梁の作品はもとより邊境を描く作品が脈々と受け繼いできたものである。[22]つまり「長岑」とは、詩歌の次元で言えば、兵士が戰いに命をかける苦しみと望鄉の場・北方邊境に連なる地であった。

次に、崔駰の故事から讀み取れる心情について見てみよう。長岑という僻遠の地に行くことを「不得意」と感じ、隱棲する崔駰は、安藤氏がいうように「都で官僚として生きる日常をともかくも許容できる」一方、北方邊境で過ごすことは受け入れられない。北方邊境で過ごすことに比べれば、官を捨て隱棲したほうがましだ。以上のような心情を、この故事から讀み取ることができよう。

「擬詠懷」其の一に戻れば、歌い手は初めから「不得意」だから、長岑に赴く必要などない、と述べる。すなわち、崔駰の故事の中ではその名を聞いただけで隱棲を決意させた場、詩歌の次元では兵士を過酷に苦しめる場、そこで感じるであろう苦しみよりもなお一層強い苦しみを、歌い手は現在の環境においてすでに感じていると述べている。作者庾信の狀況に卽して言えば、今いる環境とは長安のことである。長安は長岑の苦しみとは比べ物にならないほど、自身に強い煩悶を起こさせる場なのである。北方邊境に對する忌避の情が讀み取れる崔駰の故事を用いて、庾信は北方邊境とは比肩できないほどの長安での苦

しみを表現しようとする。

「擬詠懐」其の一においても、故事を構成するキーワード（「長岑」と「不得意」）はそのまま用いられている。だが、長岑が「不得意」だという故事の文脈を、今いる環境が長岑よりもなお一層「不得意」だと言い換えることで、邊境での苦難を上回る長安での苦しみの深刻さを表現する。庾信の長安表現において、邊境の要素を取り上げることは、第二章で述べたとおりであるが、「擬詠懐」其の一はただ長安と邊境を重ね合わせるだけにとどまらず、長安の方が邊境よりも苦しく過酷だと述べる點で、他の作品よりも長安で過ごす煩悶を強く表現していると思われる。

「擬詠懐」其の一・其の五に見える典故表現は、以下のように言えるだろう。故事を構成する主要キーワードを詩中に用いて、故事が本來内包する心情を讀み手に喚起させる一方で、キーワードの配置を組み替えて、故事が内包する心情とは異なる、作者自身が表現したい心情を表現するものである。北方邊境に對する忌避の情、京畿に對する憧憬の念、これらの心情をまず提示し、そのうえで長安という場所は、忌避される邊境より過酷で、關外のように恥ずべき場なのだと歌う。これは故事が示す意味内容にそのまま從うのではなく、自身の心情を訴えるために、古典の内容そのものを再編成する手法と言えよう。そして再編成を經た後も、故事のキーワードそのものが故事本來の内容を否應なく想起させるために、かえって古典の中には存在しない、庾信自身が歌おうとする「煩悶・慙愧の場としての長安」がより鮮明に立ち現れてくる。この典故表現は、古典に隷從せず、「個」の心情を軸とする庾信の創作姿勢に根差して生まれてきたのではないだろうか。

おわりに

北朝に渡ってのちの庾信は、長安で過ごす自分に對して、ひいては長安という場所に對して、慙愧や煩悶といった負の心情を抱くようになったと考えられる。このことは庾信の作品の隨所に現れ、また先行研究でも指摘されているところである。では、この過酷な現實に由來する新たな負の心情をいかに詩中に表現したか。南朝で共有されていた、憧憬の念に支えられた表現手法を用いることはもはや不可能である。庾信には南朝で當たり前だった華北に對する憧憬、それを表現する手法を壞して、新たな表現の方法を模索する必要があった。そこで見出されたのが、長安と邊境とを重ね合わせる表現であり、また「擬詠懐」における故事の内容を再編成する典故表現であったと考えられる。これらの表現はともに、南朝で一般的であった華北や邊境に對する文學的イメージを強く喚起し、それでいて作者庾信の心情に即するよう、意味の組み換えを施されたものであった。こうした表現からは、南朝の文學創作世界、南朝の人々が當然のものとして共有していた華北にあこがれる精神性から決別し、自らの境遇と心情という「個」を眞摯に表現しようとした庾信の創作姿勢がうかがえる。

使用文獻は以下の通り。『十三經注疏』（藝文印書館、一九六五年）、中華書局本『史記』（一九七五年）、『漢書』（一九七五年）、『後漢書』（一九七三年）、『晉書』（一九七四年）、『四部叢刊』本『鮑氏集』（一九八九年）、『庾子山集注』（中華書局、一九八〇年）、胡克家重刻宋淳熙本李善注『文選』（藝文印書館、一九九一年）、『玉臺新詠箋注』（中華書局、一九八五年）、『藝文類聚』（上海古籍出版社、一九八二年）、『初學記』（中華書局、一九八〇年）、『樂府詩

集』（中華書局、一九七九年）

注

（1）『文選』李善注に「山謙之丹陽記曰、江寧縣北十二里、濱江有三山相接、卽名爲三山。舊時津濟道也。」とある。

（2）増田清秀「南朝人作の横吹曲辭」（『樂府の歴史的研究』、創文社、一九七五年）

（3）この根據として、増田氏は「というのは、この時代に採擇された河北の簸邏廻歌六十六曲の中、陳の釋智匠の古今樂錄に二十八曲を著錄しているが、その中に「長安道」と「洛陽道」が含まれていないし、また、この二曲を作辭した南朝人の中、梁人以前のものが傳存していないからである。梁代の作家は、「長安道」に簡文帝・元帝・庾肩吾と、もと梁臣だった王褒がおり、「洛陽道」に王褒を除くこれら三人の外に、沈約・車敷がいる。玉臺新詠卷七・八によれば、彼らのうち、庾肩吾は詩人會合の席で「長安道」を賦得し、簡文帝はまだ皇太子の頃に、弟の湘東王（元帝）の「洛陽道」の作に相和している。賦得もしくは相和の作は、梁の武帝の時代に、この二つの歌曲が詩人間に知られていたことを實證している」（増田前掲書）と述べている。

（4）『晉書』卷五五・潘岳傳「岳美姿儀、辭藻絶麗、尤善爲哀誄之文。少時常挾彈出洛陽道、婦人遇之者、皆連手縈繞、投之以果、遂滿車而歸。」

（5）『後漢書』卷八・孝靈帝紀「讓、珪等復劫少帝、陳留王走小平津。」の李賢注に「小平津在今鞏縣西北。」

（6）増田前掲書

（7）王文進「南朝邊塞詩的時空思惟」（『南朝邊塞詩新論』、里仁書局、二〇〇〇年）に以下のように述べる。「南朝詩人在作品中不斷出現漢代長安的語言現象，竝不能視爲單純的「用典」。最關鍵的是南朝人士的時空思維事實上是根深柢固地烙印著漢代京洛的圖騰。」、「南朝人士這種長期援用北方時空術語的現象，的確不能單純視爲文人一貫炫博耀采「引經據典」的手法。「用典」的語意結構應該有適度「今」「古」互喩的對等準則線。可是南朝人士在使用這些術語時，往往隨意取消今古界線。而形成一種時空錯置的語調。」

（8）『漢書』卷九・元帝紀の初元二年條の師古注に「宜春下苑卽今京城東南隅曲江池是。」

（9）『文選』卷一班固「西都賦」「披香發越」の李善注に「漢宮閣名、長安有合歡殿、披香殿、鴛鸞殿、飛翔殿。」

（10）『周書』卷四一・庾信傳「時陳氏與朝廷通好、南北流寓之士、各許還其舊國。陳氏乃請王褒及信等十數人。高祖唯放王克、殷不害等、信及褒竝留而不遣。」

（11）「南冠」は、『春秋左氏傳』成公傳九年の「晉侯觀于軍府、見鍾儀。問之曰、「南冠而縶者、誰也。」有司對曰、「鄭人所獻楚囚也。」」という記事に基づく。「西河」は、『春秋左氏傳』昭公傳一三年の記事による。晉に囚われていた魯の季孫意如が、魯に歸國できるようになっても歸らなかったため、「歸らなければ、西河のほとりで幽閉するほかない（聞諸吏將爲子除館於西河）」と勸告された故事に基づく。

（12）「別張洗馬樞」（『庾子山集注』卷四）「君登蘇武橋、我見楊朱路。」

（13）『後漢書』郡國志五の劉昭注に引く郭仲產『秦州記』に「隴山東西百八十里。登山嶺、東望秦川四五百里、極目泯然。山東人行役升此而顧瞻者、莫不悲思。」

（14）この胡と漢の對比表現は、鮑照のあと、劉宋の吳邁遠「胡笳曲」（『藝文類聚』卷四二）に「漢耳聽胡音」の例が見え、さらに梁陳代の作品に受け繼がれ、邊境を題材とする作品の常套の對句表現として用いられるようになる。たとえば梁武帝は、『漢書』卷五四・蘇武傳の「（武）杖漢

節牧羊、臥起操持、節旄盡落。（中略）其冬、丁令盜武牛羊、武復窮厄。」に基づいて、「胡羊久瀏奪、漢節故支持。」（「代蘇屬國婦」、『玉臺新詠』巻七）といい、漢への忠誠心を曲げなかった蘇武の姿を描いている。また、「今朝猶漢地、明旦入胡關。」（范靖婦「王昭君嘆二首」其二、『玉臺新詠』巻十）、「寒隴胡笳澀、空林漢鼓鳴。」（張正見「度關山」、『樂府詩集』巻二七）の例もあるが、移動經路や單なる對比を表現するのみで、鮑照の描き出した相容れない二空間の關係性まで言及しない例も多い。さらに、後述する王昭君を題材とする作品の例では、「朝辭漢關去、夕見胡塵飛。」（作者不詳「王昭君」、『樂府詩集』巻二九）が擧げられる。

(15) 邊境描寫と秋との關係については、拙稿「邊境の秋と月―六朝邊塞樂府における季節イメージ」（『桃の會論集』六集、二〇一三年、一三三～一四一頁）で論じたことがある。なお『樂府詩集』巻六一では、「秋」を「愁」に作る。

(16) 興膳宏「月明の中の李白」（『中國文學報』四四、一九九二年、六〇～九一頁）に六朝期の月表現について、「共に住むべき夫と妻が不本意にも生き別れ狀態にあるとき、滿月は二人にとっての正常な願わしかるべき姿を暗示する。（中略）團圓の狀況にない人は、明月を仰ぎながら、團圓の回復を切に願って、今どこか遠くにいるはずの相手の身を思いやるのである」と述べられている。

(17) 「時樓船將軍楊僕數有大功、恥爲關外民、上書乞徙東關、以家財給其用度。武帝意亦好廣闊、於是徙關於新安、去弘農三百里。」

(18) 注（19）の李賢注に「長岑、縣、屬樂浪郡、其地在遼東。」

(19) 「及（竇）憲爲車騎將軍、辟駰爲掾。憲府貴重、掾屬三十人、皆故刺史二千石、唯駰以處士年少、擢在其閒。憲擅權驕恣、駰數諫之。及出擊匈奴、道路愈多不法、駰爲主簿、前後奏記數十、指切長短。憲不能容、稍疎之、因察駰高第、出爲長岑長。駰自以遠去、不得意、遂不之官而歸。永元四年、卒于家。」

(20) 安藤信廣「「擬詠懷二十七首」の方法」（『庾信と六朝文學』、創文社、二〇〇八年。初出は「庾信詩論考―『擬詠懷』二十七首を中心に―」、『加賀博士退官記念中國文史哲學論集』、汲古書院、一九七九年）

(21) 『漢書』二八下・地理志下「遼東郡、秦置。屬幽州。」、「東有漁陽、右北平、遼西、遼東、西有上谷、代郡、雁門、（中略）皆燕分也。樂浪、玄菟、亦宜屬焉。」「薊、南通齊趙、勃碣之閒一都會也。」師古注に「薊縣、燕之所都也。」

(22) 注（15）拙稿參照。